

チャレンジ・ザ・ドリーム

Challenge the Dream

～群馬の明日をひらく～

平成30年12月6日（第69回）放送

当協会は、平成25年度より、FM GUNMAと共同制作番組を毎月1回放送しています。創業・起業の応援をメインテーマとし、群馬発の企業のトップインタビューを中心に構成しています。

プロローグ

こんにちは。ご案内役の奈良のりえです。夢への挑戦をテーマに企業トップへのインタビューなどをおよそ1時間にわたって放送している「チャレンジ・ザ・ドリーム」。今日のトップインタビューは、前橋育英高校などを運営する学校法人群馬育英学園の中村有三学園長、88歳です。中村学園長は兵庫県出身で、もともとは養蚕の指導者として活躍していましたが、友人の誘いで新天地前橋で起業。しかし、同僚の裏切りで倒産。再起を図る中で予備校経営を任されるようになり、やがて32歳の若さで前橋育英高校を創立しました。その後も平坦な道ではありませんでしたが、大学や専門学校などを設立し、学園を築いてきました。その人生はまさに不撓不屈の挑戦。中村学園長にチャレンジの様子とそのスピリッツを伺っていきます。番組後半は訪問インタビュー。トイレ掃除を専門に手がけている前橋市の「アメニティ」を紹介します。

【プログラム】

■トップインタビュー

学校法人群馬育英学園

中村有三 学園長

■保証協会からのお知らせ

「ぐんまグッドサポートガイド」平成30年度改訂版の発行について

■チャレンジ企業紹介コーナー

アメニティ

◎アナウンサー 奈良のりえ

トップインタビュー

学校法人群馬育英学園

中村有三 学園長

——学校法人群馬育英学園の中村有三学園長にFM GUNMAのスタジオにお越しいただきました。どうぞよろしくお願いたします。

中村学園長：よろしくお願いたします。



【収録風景：FM GUNMA スタジオにて】

【学校経営に携わった経緯】

——中村学園長が学校経営に携わっていくきっかけは、予備校で働くようになったことだったそうですが、なぜ予備校で働き始めたんですか。

中村学園長：私は京都の学校出身ですが、群馬県で同窓会がありました。先輩で福井さんという方がいたわけですが、福井さんのほうが私を後継者としていたからということで呼んだわけです。

——学園長は兵庫県のご出身でいらっちゃって、京都の専門学校に行ったんですね。そしてご縁があって群馬にいらしたわけですが、同窓会ですか？

中村学園長：はい。

——で、そこで福井様との話の中で、なんと奥さまも紹介され。福井様の姪御さんに当たる方ですね。

中村学園長：はい。

——そして、予備校の運営も携わってほしいというようなことになったわけですか。

中村学園長：はい。

——まさにこの福井様との出会いが、運命を決定付けましたね。予備校の運営はうまくいきましたか。

中村学園長：うまくいったということが言い得るのかどうか、いずれにしても予備校というのは大学受験と、高校受験がありましてね、当時、中学浪人がずいぶん出ていたんです。中学卒業で高校に入れない人たちがね、約300人ぐらい予備校に来ておりまして、それを面倒見たんですね。前橋に普通高校というのは前高1校でしたよね。

——ああ、男子高校が。

中村学園長：男子高校が。それに殺到するわけですけどね、結局ずいぶん落ちるわけですよ。それで、そればかりじゃなくて、方々から。もうとにかく高校が少なかったですから。その後、県のほうがね、12校くらいつくったと思います。前橋も、前橋南、そして次は東、西と、できたわけですね。

——そうですね、公立高校ができていきました。

中村学園長：そういう中で先陣を切ったのが農大二高ですよ。それで、前橋にもという声があったんですが……。

——なるほど。

中村学園長：誰かがやるだろうと思っていたんですけども、誰も手を挙げる人がいないようで。で、当時、うちに指導に来ていた先生たちが前高の先生が多かったん

ですよ。「あんた、つくれよ」と。「応援するぞ」というようなことを言われまして。というのは、私がずいぶん浪人生を激励し、散々これをやっていたものですから。

——さんざん叱咤激励をしていたところを見ていた。

中村学園長：それを見ていてね、まあ大学受験は仕方ないですけども、高校受験で浪人を出すというのは、これはちょっとかわいそうですよ。ということから、もし自分の高校があれば、これを全部入れちゃうんだがな。そういう気持ちもあってね、やむにやまれぬ気持ちが出ました。

——浪人生を救いたいという思いで、予備校の運営に携わってから3年後に高校をつくる状況になっていった。周りの皆さんからの、要望があったということなんですよ。

中村学園長：はい。

——そして、その学校開設によいよ向かっていくわけですけども、高校の開設というのはご苦労もあったと思いますが、校舎とか土地というのはどのように用意していったんですか。

中村学園長：いやあ、これがおもしろいんですね。

——おもしろいんですか。いろいろな物語がありますね、これは。

中村学園長：あります。実は群馬高専の予定地だったようです。

——もともとは群馬高専が、その場所に建てるわけだった。

中村学園長：そう、そうなんです。ところが、政治的な関係で、高崎と前橋の引っ張りっこになっちゃってね、それではというので、頭のほうは高崎、それでしっぽのほうは前橋というような形でいったのが、鳥羽の今の場所なんです。そうしたら、こちらがパカッと空いちゃいましたから。さあ困ったというところへもってきて、いきなり許してくれたと。

——校舎というのはどのように？

中村学園長：邑楽郡の高島小学校というのが、古い校舎をね、すぐ壊すということで、行く先を考えていたところへ紹介されたんですね。それで、「ああ、それならば、小学校であろうと何であろうと、とにかく校舎をつくら

ないことには間に合わない」ということで、OKしちゃったんですよね。そうしたら、1週間で持っていてくれるということで……。

——1週間で持って行ってほしい？もう急ピッチで運ばなくてはならないと。

中村学園長：そうです。

【前橋育英高校開校】

——そして、昭和38年（1963年）に前橋育英高校がスタートしました。この育英という名前には、いろいろな熱い思いが込められているそうですね。

中村学園長：はい。これはね、君子の三楽に出てくるね……。

——君子の三楽？

中村学園長：はい。君子に三つの楽しみありと。1番目がね、父母健在にして兄弟事なきは一楽なりと。2番目が、仰いで天に恥じず伏して地に恥じざるは二楽なり。そして3番目が、天下の英才を集めてこれを教育すると。これが育英の語源なんです。

——これはどういう意味ですか、学園長。

中村学園長：はい。一つには、一家団欒、平和な家庭。2つ目が、不正は絶対にやらない、誠心誠意。3番目が、子どもの教育と。ところが私はね、天下の英才を集めるんじゃないで、勉学の師弟を集めて、これを英才にすると。英才とはなんぞや。一芸に秀でていればいいじゃないかと。全科優良じゃなくていいということが一つの信念になって、誰にもいいところがある、必ず自分のやりたいことがある。それを必ず伸ばせる学校、それを育英と、こういうことです。

——人は誰でもさまざまな可能性を持っているのだから、その才能を伸ばしていこうではないか、育んでいこうではないかというのが育英の語源になっていったわけですね。

中村学園長：そうです、はい。

——いやもう、本当にこの理想が全てを物語っていくという気がいたしますが、学園長、この学校運営はどうでしょう、うまくいきました？

中村学園長：いやあ、これは大変でした。

——どんなところが一番大変でした？

中村学園長：これは教職員の統括ですよ。

——ああ、先生方をまとめる。

中村学園長：ええ、組合にやられましたね。

——学校をよくしたいという思いがぶつかるからこそね、やっぱりスタート時というのはいろんな問題が生じますね。それをどのようにまとめ上げていったんですか。

中村学園長：もうこれはまとめるとか何とかじゃなくて、とにかくやらなければならないということですね、就職した先生たちは飯を食っていかなきゃなりませんから、とにかく仕事をやらせてもらう。自分に課せられたその授業時間はちゃんとやらせてもらうということしかなかったですね。

——それから経営的にはいかがでした？

中村学園長：いやあ、これはね、徒手空拳と言えば大げさかもしれませんが、事実そういう状況で、金のないところで、もう結局銀行しかありませんが、先代が取引停止処分を食っているものだから、予備校のときのね。

——予備校のときのさまざまなこともあって……。

中村学園長：借りようがないんですけども、ある銀行が貸してくれたんです。

——ちゃんとこの先を、未来を見据えて、貸してくださる金融機関もおられたということなんですね。

中村学園長：はい。

——やっぱり生徒の人数を確保するというのは、これは一つ大変でしたか。

中村学園長：これはね、まあ最初は600人ぐらい受験しましたよね。その後になると、もうずいぶん多くなってくるんですが。

——ええ。

中村学園長：定員が300人でしたからね。

——ああ、倍ですね。

中村学園長：だけれども、試し受験が多いですから、公立に受かると、みんな公立に行っちゃいます。

——ああ、そうですね。その辺がやっぱり難しいですね。予想がつきにくいわけですね。

中村学園長：そうそうそう。

——いや、その生徒の確保も大変ですし、経営的に安定するまでももちろんお時間はかかったと思います。また、教職員をまとめていくという上でも困難があったというお話ですが、そういった幾つもの困難をどうやって乗り越えたんですか。

中村学園長：私は自分自身を変えるということがなかなかできませんから、ありのままの姿でとにかく職員の方々にも訴えて、そして授業はしっかりやってもらう。父兄の期待に応えていかなければ、皆さんが来なくなったらどうしますということで理解をいただいて、職員の方々にね、頑張っていたいたということでしょうかね。——どうしてそこまで頑張っておられたんでしょうね。

中村学園長：まあやっぱりね、この学校をつぶしちゃあならん。せっかくできた学校なんだから、どんな苦労をしてもね、はいつくばっても何とかしなきゃならんという、それだけです。

——もう本当にその信念の強さ、これが学園長を支えておられたんですね。

中村学園長：はい。



【前橋育英高校】

【幼稚園の開設】

——ところで、高校開校の3年後に幼稚園をおつくりになりましたよね。

中村学園長：はい。

——今お話を聞いていると、高校だけでも、かなり激動の時期で忙しかった、大変だったでしょうに、なぜその時期に幼稚園を始めたんですか。

中村学園長：いや、これはね、始めたときに公地を、学校の敷地とはつながってないんですけども、今幼稚園のあるところですけどね、その土地を学園の本部というつもりで買ったわけです。ところが、住宅ができる、そして園児がいますね。今度は父兄たちがね、幼稚園をつくってくれと。それで、自治会長がね、幼稚園をつくってくれなけりゃ、もう返せと、市に返せと。そんなわけで買ったわけでも何でもないのでね。

——そうですね。

中村学園長：そういうことを皆さん、勝手に理屈をつけてね……。

——リクエストが出てきましたね。

中村学園長：ええ。それで、高校のほうは反対なんです。今建ったばかりなのにね。

——3年ですものね。

中村学園長：で、学校の金を持ってきて幼稚園を建てるのかと。さて困ったと。で、家内と相談したところが、「じゃあもう2人でやりましょう」と言ってくれて、個人で、家内と2人で始めました。家内は資格を持っておりましてし、保育園ですけどね、経験があったですからね。

——ああ、そうでしたか。

中村学園長：それで、まあ最初は23人しか来なかったですからね。それを家内が面倒を見て、私が中古のバスの運転をして。

——ええっ、学園長、自らですか。すごい。

中村学園長：それで、女房が添乗員になってね、2人で送り迎えをしていましたよ。

——二人三脚で……。

中村学園長：はい、二人三脚で。

——もう地元の方々のリクエスト、要望に応えるべく、幼稚園の運営もスタートさせたと。では、ここで1曲お届けしたいと思います。これはやっぱり学園長の思いが重なりますか。

中村学園長：はい。

——それではじっくりと聞きたいと思います。畠山みどり『出世街道』。

【保育専門学校、短大開設時の思い】

——前橋育英高校の開校から7年後、昭和45年に保育専門学校を開校。さらにその7年後、昭和52年に短大を開学と、新たな学校をスタートさせてきましたが、これは学園長、どのようなお考えだったんですか。

中村学園長：はい。まず保育専門学校は、幼稚園の先生を養成する目的を持ってつくった学校ですが、育英高校の木造校舎がガラッと全部空いちゃったんです。39年に本校舎を建てたからということもありますが、これが空いて遊んでしまっていた。

——もったいないですものね。

中村学園長：もったいない。そういうことで、幼稚園はやりました。ところが幼稚園の先生を探して回るが、幼稚園の先生はいません。

——あら。

中村学園長：子どもが好きだというだけで入ってくる人は、資格は持っていない、技術もないし、資格を持っているのに値しないような内容。ピアノは弾けない。おしりの面倒を見るのもね、汚なると。これじゃ全然、もう先生としては駄目だけれども、そういう先生が多かった。我々の歴史が浅いせいもあったでしょうけど、いい先生が来ないから、これじゃいかん。まず、いい先生を育てなければいかん。空いた校舎があった。それならば幼稚園の先生を養成しようということで、保育専門学校をつくった。最初はたった19人しか来ませんでした。

——スタートは。

中村学園長：それで、その次の年はもう一杯になりました。

——ということは学園長、振り返ってみますと、その朝日が丘の幼稚園がなければ、そういう発想にも行き当たらなかったというか。

中村学園長：でしょうね。

——そして、その後に短大も開学なさいましたけれども、これはどういったところからですか。

中村学園長：その保育専門学校をそこで切り替えて短期大学にしたわけです。当時ね、群馬高専というのができましたね。

——はい。

中村学園長：で、群馬高専がなぜできなきゃならなかったか。5年教育のね、それだけのスパンじゃないとうんぬんということでね、群馬高専ができたわけですね。で、私はそれを見てね、「あ、そうだった。やっぱり一つの技術を教えるというのは5年かかる」と。ならば育英でと思い、育英高校の保育科をつくったんですよ。全国でもまれですよ。ないですよ。

——本当に草分けですね。

中村学園長：高校の中に幼稚園の教諭を育てる保育科をつくった。

——画期的ですね。

中村学園長：それと併せて3年と2年で、5年のジョイントでね。そうするというと、それで素晴らしい幼稚園の先生をつくろうと、もうそういう計画でやったヒントはね、群馬高専ができたから。私は保育専門学校をね、5年にしましたが、四苦八苦だから、こここのところでね、やっぱりもっとアピールするのだから、かんといいことで、それを短期大学に切り替えたわけです。で、短期大学に切り替えて、その後、将来4年制大学をつくりたいと。

——もう昭和50年当時から4年制大学をというのを夢としてお持ちだったんですね。

中村学園長：持っていたんです。

【4年制大学、育英メディカル開学】

——そして、今年、その夢がかないました。4年制大学開学。学園長、御年88歳で夢がかないましたね。

中村学園長：はい。

——どんな思いで開学の日を迎えましたか。

中村学園長：いや、もう正直言ってね、本当に泣けてきますね。うれしいですね。ああ、できた。これで堂々とせがれに譲れる。せがれは、理事長をやっていますけれども、私の思いを継いでね、4年制大学でしっかりやってほしいということで、私が学校のそういうのをやるの

は、これでね、私は大きな役割を果たしたと、そういう感じでした。ですから、4年制大学ができたことによってホッとすると同時に、やっぱり将来の夢というものをね、つくり上げてほしいと、そんな思いでございますね。

——次にバトンタッチをして、この情熱をさらに次世代へというような、そんな思いだったのでしょうか。

中村学園長：はい。

——一方、これとは別に、鍼灸と柔道整復師の専門学校、育英メディカルを12年前、平成18年に開校しましたが、これは英数学館、皆さんよくご存じの……。

中村学園長：そうです。

——その予備校からの方向転換だったそうですね。

中村学園長：はい。まあこれはねえ、はっきり言いまして、もう予備校の時代は過ぎたと。役割は終わったと。ずっと続けていましたけれども、まあやっぱり赤字を出しましたね。それで、私が理事長というだけで、館長というのは別の人がやっていたからね。そういったことで、だんだん借金がかさむようになってきた。このままじゃ駄目だと、切り替えなきゃ駄目だということで、そして、せがれたちがね、これをやらせてほしいと言って来たものですから、「あ、そうか」と。「おまえがそういうことでやるんなら、俺も一肌脱ごう」と。

——この専門学校をつくる時なんですけれども、ここでまたちょっとした波乱万丈があったと聞きましたが。

中村学園長：これはね、まあ、ここが私学の苦しいところですね。予備校で赤字を出して、赤字が累積しちゃったんですよ。で、1億5,000万円、用意しなきゃ認が出ないと。それでもうこれはね、残念だけど、ほかに身売りするしかないかというところ、本当に悩み苦しんであちらこちらと交渉しましたがけれども、みんな条件が悪い。そういう中で、もうこれはやむを得んと。銀行から借りて、そのまま寄付という形をして……。

——ご自分のお金を投げ出したってことですよ。

中村学園長：そうです。だってそこまでやったのに、つぶすわけにいかないじゃないですか。これは私学の宿命で、経営者として責任持たなきゃならないと。我々はね、あの世までは借金を持っていかない。ならばいいじゃないかと。

——いや、その不屈の精神。並々ならぬ決断ですね。



【育英大学・育英短期大学】

【ピンチのときの考え方】

——次々と学校をつくり、走り続けてきた人生だと思えますけれども、学園長、大変パワフルではありますが、途中で疲れてしまったり、諦めそうになることってなかったんですか。

中村学園長：うーん。まあ疲れたって言えば疲れたかもしれないけど、そういうことを感じちゃならないと思っていましたからね。

——ああ。感じないというより、感じちゃならない。

中村学園長：そう。

——寝られないほど悩んだりとか。

中村学園長：まあ、そういうことはないですね。

——あ、しっかり寝て。

中村学園長：ええ。なったらなつたで、もうしょうがないと。もう腹を決めていますからね、結構それはね、しのげたしね、まあ何よりこれまでやってきたんだから、やれないことはないよと。銀行がお金を貸してくれる間はね、そんなのやればいよという気持ちになっちゃってね、みんなにね、「まあ、そんな心配せんでもいいや」と。

——ピンチに陥ったとき、どういうふうには乗り越えたいと思いますか。

中村学園長：とにかくもうやるしかないということ以外にはないような気がしますね。

——失敗したらどうしようかと思いませんか。

中村学園長：いや。失敗したら失敗でね、それで、それと付き合いばいいですから。

——失敗と付き合い。

中村学園長：ええ。それを取り戻すという気持ちでやればね、失敗も成功の内だと。

——なるほど。

中村学園長：ええ。本当そのぐらいの気持ちにならないとね、新しいことも何もできませんね。

——ああ、失敗を恐れてはできない。

中村学園長：ええ、そうです。失敗を恐れては何もできません。自分に能力がないからって言ったって、人の能力を借りればいいですもの。

——そういう能力のある方の力を借りる。

中村学園長：そうそう、そういうことです。もうそれしかないじゃないですか。

【野球部、サッカー部の活躍】

——5年前、平成25年に野球部が夏の甲子園に初出場、初優勝。そして今年1月には、サッカー部が全国サッカー選手権で初優勝と、部活動の活躍が著しいですが、学園長、どんな思いで見守られていますか。

中村学園長：これはもう感動そのもので、本当に感謝しかありませんが、これはね、野球も、サッカーも、やっぱりこの指導者、特に監督ですね。2人の監督が、それぞれ性格は違うでしょうが、本当によく頑張ってくれました。

——なんでも、山田監督のスカウトには、ちょっとしたドラマがあったとか。

中村学園長：まあ彼は九州の長崎の出身ですけども、本人と面接して、私はもう本当にすぐさま決めました。3月のギリギリでね、もう28日でしたから。

——もう4月目のところで。

中村学園長：そうです。そこでもう、独断で決めちゃいました。

——山田監督に決めた決め手って何だったんですか。

中村学園長：いやあ、何ていうんでしょうかね、スピリットとか、そういうものが何かね、パッと感じたんじゃない

ないでしょうかね。でも結構私はしゃべったかもしれませんが、本人には。

——思いを伝えて。

中村学園長：ええ。だけどもあ、石の上にも三年ということわざがあるから、最低3年はいてねと。そんな話をしてね、3年ぐらいたてばもう帰るものと思っていました。

——ああ、そうですか。それがなんとなんと、ねえ、全国一まで。

中村学園長：ありがたいですねえ。いや、実によくやっていますよ。だから、今、校長をやっていますけれども、重荷に感じないで、本人はね、堂々とやっていますよ。

——今年も全国ナンバー1に向けた闘いが間もなく始まりますね。

中村学園長：はい。

——もう群馬県民みんなで応援していきたいなんて思いますけれども。

中村学園長：どうもありがとうございます。

——そして、せっかくですから、野球部の荒井監督への思いなども教えてもらえますか。

中村学園長：いや、表面は優しい男に見えますが、とにかくね、真面目に生徒たちの面倒を見てね、本当によく頑張っています。派手さはないけどね、本当にコツコツとよくやっていて、生徒をよくあそこまでまとめている。

——そうですね。

中村学園長：そしてね、本当に生徒たちが朝早く起きてね、そこらを掃除したり、ごみ拾いしたり、あれは立派ですよ。私は不撓不屈を言っていますけれども、野球場にもこう、掲げていますよ。だけれども、彼が掲げるのは凡事徹底。不撓不屈っていうのを使ってほしいとは思いますが、まあ、本人がね、そこまでやっているから、注文は一切つけません。

——（笑）学園長も。でもそういったところを自由に、監督さんのやりやすいようにということで、見守っておられるんですね。

中村学園長：そうです。私は一切何も言いませんよ。成績を見て「よかったねえ」と。だから、普通の人と同じような形ですよ。特別私がどうのこうのは言いません。

【学校経営】

——ところで、学校経営についても伺いたいんですけども、中村学園長は、別の業界から教育の世界に入られたわけですけども、学校を経営する上で、教師でないことがデメリットになりませんでしたか。

中村学園長：いやあ。もし私が教師をやっていたら、やらなかったでしょうね。

——それはどうしてですか。

中村学園長：だって教育にのめり込んで、一人ひとりの生徒がこうということになるとね、それどころじゃありませんよ。

——経営してられない、もう生徒一人ひとりを見ています。

中村学園長：そう。遠いところを眺めながら、そして足元を見てね、足元をよく分析するんですよ。私学の良さはね、先生が替わらないで定年までいてくれることです。公立はね、うっかりしちゃうと、3年、4年で替わるでしょう。「うわあ、これいいな」と思ったら、またこっちへ替わるわけ。それじゃあ、なかなかそうはいってできません。そこに私学の良さがあるんですよ。だから、その点で、今、本当に感謝感謝ですね。本当に生徒一人ひとりを大事にしてくれるし、それは何より保護者のほうからの声がそういう声なものですから、我田引水ではないと思いますよ。だから、私も本当によく面倒を見てくれているなと思います。

【中村学園長の心の支え】

——さて、今日は時間が足りないので、お話を伺っていないんですが、実は中村学園長は、前橋に来る前、関西にいらっしゃった若いころに、大病を患ったり、現在のミャンマー、当時のビルマに技師として派遣されて、養蚕の指導を行い、凱旋のつもりで帰国すると、なんと会社内の事情が変わっていたりというふうに、本当にご苦労を重ねられていて、まさに波乱万丈の人生なんですけれども、いつも前を向いて歩いてこられました。その心の支えは何だったんですか。

中村学園長：いやあ、心の支えと言われても、何ていうんでしょうかね。強いて言うなら、私は夢という言葉が

大好きなんですけども、自分の常に描く、やっぱり理想像というんですかね、学校の理想像、そういうものを常に描いているということが、でしょうかねえ。

——その夢に向かって立ち向かっているからこそ、それが心の支えになり、不屈の精神で乗り越えてこられた。

中村学園長：はい。それとね、私のところのキャンパスを見てくだされば、水と緑と太陽、この三拍子はね、育英高校もそうですけれども、今度大学になったキャンパスを見てください。それはもう、これだけ木があってね。学生というのは、そういう水と緑と太陽、自然環境に恵まれていないと。学園というのはそういうものでなきゃいかんと思います。ですから、今、木がこんなに大きくなっているんですよ。その下で学生たちがね、かいた汗をふきながら休憩する。時にはそこらでいろんなものを友達同士で食べ合っているというような姿を見るとね、「うわあ、やっぱり学園っていいな」と思いますよ。

——学ぶ環境って大切ですよ。

中村学園長：大切ですよ。

——またその学生さんたちの生き生きとした笑顔が、学園長にとっても生きがいになっているのではないですか。

中村学園長：いやあ、本当にそうです。

【起業家や新規事業へ挑戦する人へのメッセージ】

——最後に、起業や新しい事業への挑戦を考えている人へのメッセージの意味も込めてお話しただければと思いますが、新規事業に取り組んだり、経営をしていく中で、大切なことは何だと思いますか。

中村学園長：まあ、これはね、「焦るな、腐るな」そして、「前を向いて夢を忘れない」ということになりましょうかね。まあ、それは自分に言っていることですけど。

——今までを振り返ってみて、そういったことの連続でしたか。

中村学園長：そうですねえ。でも、まあね、家内と、この道に入って本当によかったなど、2人で毎日話しています。教育の世界にいてよかったなど。いつ、何がどう起ころうとね、もう本当に悔いのない人生だと自分たちで思っています。夢ということですかね。いつまでも、

20歳は20歳の夢、30歳は30歳の夢、また、80歳も夢、そういう表現しかないんですかね。

——いやあ、素晴らしいお話です。88歳の今の夢は何ですか。

中村学園長：まあ、この4年制の大学が、一番厳しいところですがね、何とか成功してほしい。素晴らしい大学になってほしいと、それを願うばかりですね。

——今日は不撓不屈の精神で夢をかなえてきた学校法人群馬育英学園の中村有三学園長にFM GUNMAのスタジオにお越しいただき、お話を伺いました。本当に貴重な体験談をありがとうございました。

中村学園長：どうもありがとうございました。

——さあ、それではもう1曲、リクエスト曲をいただきましたので、お届けしたいと思います。美空ひばりの『柔』。今日はどうもありがとうございました。

中村学園長：ありがとうございました。

保証協会からのお知らせ

「ぐんまグッドサポートガイド」平成30年度改訂版の発行について

——ここからは群馬県信用保証協会からのお知らせです。群馬県信用保証協会の鈴木課長代理にお話を伺います。鈴木さん、よろしくお願ひします。

鈴木課長代理：こちらこそよろしくお願ひします。

——保証協会では、中小企業の皆さまへの支援業務について説明している冊子を作成していますよね。

鈴木課長代理：はい。当協会では、中小企業の皆さまの借り入れに対する保証のほかに、「創業支援」「経営支援」「再生支援」「事業承継支援」などの各種支援業務にも積極的に取り組んでいます。こうした支援業務について、中小企業の皆さまや関係機関の皆さまにより一層のご理解をいただくため「ぐんまグッドサポートガイド」を作成しており、このたび、平成30年度改訂版を発行いたしました。

——こちらのガイドブックは、一般的なパンフレット

よりもサイズが小さくて、持ち歩きしやすいようになっていますね。さて、冊子の内容が気になりますが、どのようなものになっていますか。

鈴木課長代理：各種支援業務の説明、支援のご利用の方法、保証制度のご案内や支援の取り組み事例などを掲載させていただいております。特に、支援の取り組み事例は、中小企業の皆さまが、当協会を身近に感じていただけるように、わかりやすく具体的にまとめるよう心掛けました。

——保証協会の支援業務は、年々その幅を広げていますが、今回の「ぐんまグッドサポートガイド」の改訂にあたって新たな要素はありますか。

鈴木課長代理：平成30年度改訂版には、新たに「事業承継支援」を盛り込みました。掲載内容は、事業承継にかかる相談対応、計画策定支援、保証制度のご案内となっています。また、当協会で行った事業承継支援の事例についても掲載しておりますので同じ課題を持つ経営者の方にお読みいただければと思います。

——保証協会に関する情報がまとめられていて、とても充実した内容となっていますね。中小企業の皆さまにとっても経営課題の解決に向けたヒントが詰まっています。ぜひお手に取っていただきたいと思いますが、この「ぐんまグッドサポートガイド」はどちらで手に入れることができますか。

鈴木課長代理：はい、ご希望の方は、当協会の本店または支店の窓口にご越しいただくか、企画課までご連絡ください。ご連絡いただいた方には郵便などでお送りさせていただきます。企画課の連絡先は、当協会のホームページでご確認ください。

——鈴木さん、今日はありがとうございました。

鈴木課長代理：ありがとうございました。

チャレンジ企業紹介コーナー

アメニティ

「チャレンジ・ザ・ドリーム～群馬の明日をひらく～」
 続いては訪問インタビューです。今回の訪問先は、トイレ掃除を専門に手がけている前橋市の「アメニティ」です。代表の星野延幸さんは63歳。友人と共同経営した清掃会社でトイレ掃除に巡り合い、37歳で独立しました。独自の清掃道具を開発して特許を取得したり、海外でも清掃指導を行うなど活躍していて、取引先は幼稚園やお寺、大型飲食店など、およそ160社に上ります。当初はトイレ掃除に抵抗があったものの、今では天職と考えているそうです。トイレ掃除という仕事を選んだ理由や思いなど、星野さんにお話を伺ってきました。

——私は今、前橋市江田町のアメニティに来ています。星野さん、どうぞよろしく願いいたします。

星野さん：よろしく申し上げます。



【収録風景：アメニティにて】

——トイレ掃除との出会いは、友人と共同経営していた清掃会社だったそうですね。

星野さん：そうですね。当時、レンタルのマット、モップというのがあったんですが、その商売の中に、小便器に尿石の防止剤を設置するという仕事がございます。しかしレンタルのマット・モップというのは買って貸すということで非常にお金がかかる。で、どれを伸ばそうか

というときにですね、そのトイレ掃除と尿石の防止剤っていう仕事を伸ばそうということになったわけでございます。

——その後、なぜ独立を決意したんでしょう。

星野さん：1年半ぐらい一緒にさせていただいたんですけども、社長さんですね、私の経営に対する考えが合わない。で、じゃあお互いに別の道を行こうよということで、独立後トイレ掃除ということの主たるものになりました。特に意識したのはですね、長く仕事を続けたいということで、長く続けるためには、人が嫌がる仕事、人がしない仕事がいいよという勉強をしていたもので、トイレ掃除で独立したということになりました。

——どうやってお客さまを増やしていったんでしょう。

星野さん：そうですね、よく電話などで営業をしたときに、「便器のクリーニングです」と言うと、なんか向こうは聞いたことがない言葉というか、「電気をなんかするの？」と。

——「べ」と、「で」で。

星野さん：そうなんです。便器ということに対しては思いが至らなくて、電気ということで伝わったみたいで。まあわかっていただくんですね、非常に変わった商売だみたいなことで、掃除させていただくんですけども、特に1便器無料ですということ、お客さんにご理解いただきました。

——個人のお客さまを対象にしていたんですか。

星野さん：法人と個人で分けますと、法人ということで、5便器以上あるところということを……。

——5つの便器。

星野さん：ええ、意識しておりました。ですので、大体ですね、車で通ってみればカーディーラーさんとか、お寺さんとか、幼稚園とか、大型の飲食店とか、5便器以上あるところにおいて、「1個をきれいにさせてください」というんですね、「うーん、まあ、タダならばいいよ」ということで、次へ進めたということですね（笑）。

——ああ、そうですか。それは何かコツとかがあった

んですか。

星野さん：いや、コツというよりは、きれいになったものを見ていただきますので、複数便器がある中で1個だけきれいになりましたから、経営者の方とか、管理者の方は、これはまずいと、この隣は汚い、その隣もきれいにしなきゃいけないという、こういうふうなんです、発想が。「じゃあ幾らになるの？」ということで、次に進めたというようなことですね。

——確かに全部を同じぐらいのクオリティにしたいと思いますものね。

星野さん：そうなんです。便器はきれいにならないんじゃないかなんて思われていたんですね。で、「あ、なんだ、これはきれいになるのか」と。

——こんなにきれいになるんだと。

星野さん：ええ。で、手鏡なんかを使って、裏のほうなんかを見ていただきますと、汚れているものとの差が歴然と見えますので、「あ、これもきれいにしなきゃ駄目だな」というようなことで前に進めました。

——お手洗いをきれいにするというのももちろんお仕事なんですけれども、そのほかに、実は星野さんは独自に掃除道具を開発して、特許を取得しているそうですが、今日は見せていただけますか。

星野さん：ありがとうございます。

——電動ドリルの先にスポンジが付いていますね、丸いスポンジが。

星野さん：そうなんです。こちらがですね、大変仕事をしてくれる道具なんです。

——おお、スポンジがぐるぐる回っていますね。これで汚れが落ちるんですね。

星野さん：はい、そうなんです。

——星野さん、で、このどこの部分をつくったんですか。

星野さん：この軸の部分です、つくりました。軸の部分は金属になっております。そしてその金属に樹脂を成形して、そしてこのポリエステルのパッドもですね、

張り付けやすくなっているという、そういうものでございます。

——便器を傷つけない、それでいて汚れは落ちるところが、やっぱり一番の違いなんですか。

星野さん：もうそこが勘所ですね。で、今までの技術というのは、手でサンドペーパーでやるという技術ですので、どうしても傷つけちゃうんです。私もそうですし、働いてくれる部下も、毎日傷つける仕事をするってつらいんですよ。

——心も傷つく。

星野さん：ええ、心も。で、長くできない。でも、傷つけないということで自分たちの仕事に自信を持ってできる。本当に、私もそうですけど、部下も喜んでやっています。

——これ、どうして特許をと思ったんですか。

星野さん：業界の皆さんにうちの道具を紹介するとですね、なんか手でやるほうがいいと。機械でやったほうが早いのにですね、皆さんがなんか受け入れてくれないと。で、長くそのことに悩んでいたんですが、ちょっと私がピンときたというか、すごい技術だと思っているけれども特許庁のお墨付き、そういうものがあればと考えていたら、それが、何というか、こうした形で特許になってしまったということですね。

——これは特許を取って、どのような名前を付けたんですか。

星野さん：これはですね、とても印象的な名前なんです、「超落ちドリルポリッシャー」という名前です。

——超落ちる、ドリルが付いたポリッシャー、洗うもの、スポンジということですか。

星野さん：はい、そういうことです。



【超落ちドリルポリッシャー】

——これは販売もしていますか。

星野さん：ええ、販売をしております。特にビルメンテナンさん、ハウスクリーニングさんのプロの方が買い求めていただくということが多くなっております。

——特許を取ったことによって、お客さまの反応も変わったのではないですか。

星野さん：何というか、私はプロとして見せたいという欲求がすごくあったんです。で、バケツだけ持って手ですした場合に、プロとアマの差が見えにくい。それともう一つは、1日に20個とか30個磨くのに、手では無理なんです。

——確かに腱鞘炎になってしまいます、星野さん。

星野さん：私、実は2年目に腱鞘炎になりました。

——ああ、やっぱりそうですか（笑）。

星野さん：はい、仕事がたくさんあって（笑）。

——そんな星野さんが起業したアメニティなんですけれども、現在は星野さん夫妻と従業員3人の5人で、個人事業主、自営業として営まれていらっしゃいますよね。

星野さん：はい。

——これ、法人化は考えなかったんですか。

星野さん：ええ、その前に法人の役員という経験がございまして、そのときにやはり法人というのは、いろいろしょっているものが多くてですね、私には重荷だと。そ

れと、このトイレ掃除の仕事を長く続けるという価値観から、自営業を選びました。しかし、自営業ですけれども、この開発には非常に多額のお金がかかりまして、信用保証協会さんから「いいよ」って言っていただいて、融資が通ったことですね、現在があるということなんです。

——まあ、事業を大きくする、会社を大きくするっていうのも、それは一つ、目標であったりビジョンかもしれないけれども、星野さんの場合には、どちらかというと規模よりも、長くお客さまと付き合っていきたい、それがプラン、目標でいらした？

星野さん：そうですね、はい。トイレ掃除をやめたんだよということになると、オーダーが来たことに対して対応できませんので、やっていますよと。なんかそういうお客さんがいるんですね、電話で。「星野さん、まだやってる？」って。「ああ、よかった」って言ってもらうことですね、こっちも本当に涙が出ちゃうんです。

——そのためにもということで、星野さんは、もうご自身の気持ちを貫いて、創業から26年がたちました。トイレ愛、便器愛が大変強い星野さんにこんなことを聞いてしまうのは恐縮なんですけれども、トイレ掃除から浮気しようになったなんていうことはなかったですか。

星野さん：ええ、私、本当に苦い思い出ですけども、やはり心のどこかでですね、きれいな格好いい仕事を選びたいということがあってですね、創業から7年ぐらいは、やっぱり自分の気持ちの中で、小便器に付ける自動洗浄を売るとかですね、ほかの気持ちっていうのはやっぱりあったんですね。でも、その7年トータルで見たときに、やはり自分が生かされたのはトイレ掃除。そんなことで決断して、やはりトイレ掃除ということで、ほかのことを整理してですね、トイレ掃除に集中してきました。

——最近ですね、『トイレの神様』なんていう曲もあるぐらいなんですけれども、トイレっていうのはこういうふう掃除してなんていう、もしアドバイスがもしありましたら教えてもらえます？

星野さん：ぜひですね、トイレは1日1回、1分掃除してほしいということをお願いしております。長時間でな

くてですね、1日1分していただければ、もうピカピカで、ずっと、私は200年使ってほしいということをテーマにしています。

——ああ、便器をですね。

星野さん：はい。便器は1,200度という高温で焼いていますので、エネルギーの塊です。これは、例えば新しいものに換えて廃棄した場合、産業廃棄物として捨ててしまうんですね。ですから、環境問題を考えると、長く使うというのは、子や孫に対しても大切なテーマなんです。ですから、ただの掃除と思わずに取り組んでほしいと思います。

——最後に、今後の目標をお聞かせください。

星野さん：今年はハワイでも講習の機会があったんですが、私の技術を広く世界にですね、門戸を開けて、私自身も伝えていきたいというようなのが今の思いですね。

——群馬から世界へ。トイレ掃除を専門に手がけているアメニティの星野延幸代表にお話を伺いました。今日はどうもありがとうございました。

星野さん：ありがとうございました。

——ウン（運）が開けてきたような気がします。

星野さん：どうもありがとうございます。

エピローグ

夢への挑戦をテーマに、明日へ向かって走っている人を応援する番組「チャレンジ・ザ・ドリーム」。今日は、番組前半は、前橋育英高校などを運営する学校法人群馬育英学園の中村有三学園長のトップインタビュー、そして後半は、トイレ掃除を専門に手がけている前橋市のアメニティの訪問インタビューをお送りしました。トップインタビューの様子はポッドキャスト配信も行っています。FM GUNMAホームページの「チャレンジ・ザ・ドリーム」のサイトをご覧ください。

「チャレンジ・ザ・ドリーム～群馬の明日をひらく～」の番組は「頑張るあなたを応援します！群馬県信用保証協会」の提供でお送りしました。ご案内役は、私、奈良のりえでした。

FM GUNMAと当協会の共同制作番組

チャレンジ・ザ・ドリーム
～群馬の明日をひらく～

【2月の放送のお知らせ】

平成31年2月7日（木）12:00～12:55

再放送 2月9日（土）8:00～8:55

ぜひお聞きください！